

大阪落語と大阪弁

大阪大学(大学院文学研究科)教授

金水 敏

2008年10月25日 於天満天神繁昌亭

やってみよう

- a そうよ、あたしが知ってるわ()
- b そうじゃ、わしが知っておる()
- c そや、わてが知っとるでえ()
- d 左様、拙者が存じておる()
- e そうですわよ、わたくしが存じておりますわ()
- f そうあるよ、わたしが知ってるあるよ()
- g そうだよ、ぼくが知ってるのさ()
- h んだ、おら知ってるだ()

ア. お武家様 イ. (ニセ)中国人 ウ. 老博士
エ. 女の子 オ. 田舎者 カ. 男の子
キ. お嬢様 ク. 関西人

役割語とは何か

- ある特定の言葉遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

(金水 2003, 205頁)

役割語＝ヴァーチャル言語

- 主にフィクションなど、仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）の世界で登場人物が用いる、仮想の言葉。その多くは現実の話し言葉を基盤に作られているが、現実に近い場合も、また現実から離れてしまった場合もある（ex. 博士語・老人語、お嬢様言葉等）。
- 役割語は作り手と受け手に同じ知識が共有されていなければ通じない。その意味で、共同体（社会）の共有財産と言える。

博士語・老人語の歴史

- 博士語・老人語の起源は、江戸時代後期の江戸の町にまでさかのぼる。
- 江戸の町は人工都市。もともと、上方語（関西のことば）の方が権威があった。
- 江戸中期以降、「江戸っ子」意識の発生とともに、下層階級から「江戸ことば」が広まる。
- 階層的対立とともに、世代的対立もあっただろう。
老人：上方語 ↔ 若者：江戸語
- 大衆的メディア（戯作、歌舞伎等）における誇張的表現
- 江戸語は東京語に受け継がれ、やがて標準語の基盤となる。
- 一方、老人＝上方語の伝統的表現は、大衆小説や子ども向けの作品に受け継がれ、今日に至る。

東海道四谷怪談(初演は1825年) (江戸後期歌舞伎)

- アへ、そんならまだにげないのか。エへ、らちのあかないやつだ。
(伊右衛門)



- アへ、何じや此衆は。物もらいにしては、扱(さて)人がらのよひ女非人。コレ、こなた衆は此川ばたにいやるからは、ひとつと爰(ここ)へ、アノ、杉戸にぬふたる男と女の、うき死がいが流ては来はせぬか。どふじや、
(孫兵衛)

大阪落語のことばは ヴァーチャル大阪弁

- 大阪落語のことばは、江戸時代後期～現代までの、いろいろな時代の大阪弁が積み重なり、織り交ぜられてできあがった、仮想的なことば。
- いろいろな役割に応じて使い分けられる言葉づかいは、現実を参考にしながら、分かりやすく、誇張されている。
- 歌舞伎や文楽など他の芸能からもさまざまな表現を借りてきている。
- 送り手である噺家さんと、受け手である町人・市民がいっしょになって作り上げ、守ってきたことばの財産。

ぜんざい公社

- 役人言葉と市民のことばの対比のおもしろさ
- 市民の方は典型的な大阪弁であるのに対し、役人は標準語的な言葉づかいや、法律用語、特に漢語(漢字言葉)が多用されている。
- 役人語の「～ますな」「～ですな」は“おじさん言葉”

禁酒関所

- 江戸時代、役人(武士)のことばと町人(番頭、手代、丁稚)のことばの対比
- 「ござる」「いたす」「まいる」「おる」など、いわゆる武家言葉
- 大坂の町には武士がほとんど居なかったの
で、この武家言葉は、歌舞伎などから借りた
仮想的な言葉づかい(役割語)と考えられる。

いかげや

- 明治時代、職人の荒っぽい大阪弁と、子どもたちの言葉づかいの対比
- 職人ことばには、「やがる」「けつかる」「ぬかす」「われ」等、荒っぽい言葉づかいが多く含まれる。
- 子どもたちのことばは、「おったん」「金るち」等、舌の回らないかわいらしさがある一方で、妙に大人びた物言いの混じるおかしさがある。
- 「細君ごわすか」など、古い大阪弁も聞かれる。

“役割しぐさ”に注目しよう！

- 落語の表現では、言葉遣いはもちろんのこと、表情やしぐさが大きく物を言う。
- 役所の役人、番小屋の侍、市民・町人、子どもなど、台詞を言うときの、噺家さんの姿勢や目線に注目しよう。